

## 第4章 歴史文化の特徴

本市では、西国街道と淀川舟運という二大交通路と京都・大阪に近い地勢によって、日本の各時代を象徴する歴史文化が育まれました。また、地形や自然的景観が形成するエリアごとにも、その特徴が表れています。

### 1. 弥生時代の暮らしを示す安満遺跡

三島地域ではじめて本格的な米作りを行ったのは、弥生時代の安満のムラ(史跡安満遺跡)です。昭和3(1928)年、京都帝国大学の摂津農場開設工事で発見され、出土した土器の研究から北部九州に成立した弥生文化が瀬戸内を経て時をおかず、近畿地方へ波及したことが初めて論証された考古学史上、有名な遺跡でもあります。住居群のまわりにめぐらせた環濠と南にひろがる水田、東と西には墓地が確認され、居住域・生産域・墓域の位置と変遷が明らかな日本国内でも稀有な弥生のムラとして知られています。また、大量の土器、木製の農具・工具や容器類、石斧や石包丁などの多彩な出土品は、当時の暮らしをしのばせ、縄文人との交流を思わせる漆塗りの櫛やカンザシもあります。重厚な木棺をはじめ、北陸や四国など他地域から持ち込まれた土器、石材なども多数みとめられ、淀川を介した広範な地域間交流がうかがえます。

市域には丘陵上に営まれた典型的な高地性集落の古曾部・芝谷遺跡や天神山遺跡、低地の集落の萩之庄南遺跡、神内遺跡など多くの弥生時代の遺跡に恵まれ、高槻丘陵から淀川低地に至る多様な地形条件のもとで展開する傾向にあります。



整備した水田(生産域)から居住域と安満山を望む



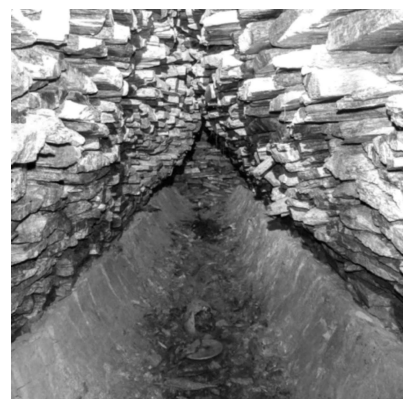
安満遺跡出土の漆塗り櫛

### 2. 古墳時代の縮図三島古墳群

市域には、古墳時代前期～終末期に至る数多くの古墳が残されています。安満宮山古墳は、3世紀中頃～後半の邪馬台国の時代に営まれ、日本最古の紀年銘鏡である中国・魏の「青龍三年」(西暦235年)の年号をもつ方格規矩鏡(国重要文化財)などが出土しています。次いで3世紀後半以降、奈佐原丘陵上に三島の王墓・前方後円墳の岡本山古墳や弁天山古墳、未盗掘の闘鶏山古墳(国指定史跡)が次々に築かれ、王家の系譜は丘陵裾の4世紀末の郡家車塚古墳や5世紀前半の前塚古墳へ続きます。

5世紀中頃には西方に巨大な前方後円墳の太田茶白山古墳(茨木市)が築かれ、小型の前方後円墳や方

墳からなる土室古墳群が造営されました。近隣にはこれらの古墳へ埴輪を供給した史跡新池埴輪製作遺跡が所在します。6世紀前半には、淀川流域最大級の前方後円墳で真の継体大王墓とされる史跡今城塚古墳が築造され、大王の儀礼をあらわした230点を超える形象埴輪が並ぶ空前の埴輪祭祀場が王権儀礼を伝えました。7世紀の特徴である小さな円墳が群集する塚脇古墳群や塚原古墳群、さらには大化元(645)年の「乙巳の変」とその後の律令国家建設をリードした中臣(藤原)鎌足の墳墓とされる史跡阿武山古墳も存在します。これらは日本の古墳時代の縮図といえ、淀川を押さえる三島地域が大和王権にとって重要だったことを示しています。



安満宮山古墳の銅鏡出土状態と出土品一括（重要文化財）

闘鷄山古墳 未盗掘の第1主体

### 3. 市域を東西に貫く西国街道

市域中央を東西に貫く西国街道は、古代の平城京・平安京と九州の大宰府を結ぶ官道・山陽道の後身です。奈良時代には、山陽道が淀川を渡る梶原に大原おおはらのうまき駅家推定地（梶原南遺跡）や市内最古の梶原寺跡、西方の郡家には山陽道に面して郡役所・嶋上郡衙や郡寺・芥川廃寺がありました。中世には芥川に関所が設けられ、のちに宿場が成立します。江戸時代には京都と西国を結ぶ脇街道として一里塚が整備され、芥川には宿駅が置かれて大名が休息・宿泊する本陣なども整い、参勤交代する西国大名や旅人らで賑わったと伝わります。

戦国時代や幕末など時代の混乱期には軍勢が往来し、歴史上に名をとどめています。現在も梶原～安満間や芥川宿周辺には街道沿いの町家が点在し、街道を往来した人々にまつわる寺社や府史跡芥川一里塚をはじめとする遺跡や旧跡、文化財が沿道に残されています。



街道沿いの古刹・一乗寺



梶原の一里塚跡

## 4. 北摂山地の山岳信仰と山間部の暮らし

市域北半を占める北部山間では、古来山への信仰由来する密教系の山岳寺院が展開し、地理的に近い京都の影響を受けた平安時代以来の聖観音菩薩立像等の仏像彫刻が伝えられています。

また田能盆地を中心とする旧檜田村は、昭和33(1958)年に京都府から大阪府高槻市へ、全国初の越境合併をしました。旧丹波国に属し山間部、寒冷地という風土で育まれた独自の歴史文化がのこります。

原や田能は淀川や西国街道から能勢妙見山や丹波穴太寺などへ至る街道が交錯し、参詣や物流に多くの人と物資が行き交いました。そうした交通に関わる文化財や、幕末～明治に海外にも輸出された寒天関連の資料などが伝わります。



聖観音菩薩立像  
(田能自治会蔵、市指定)

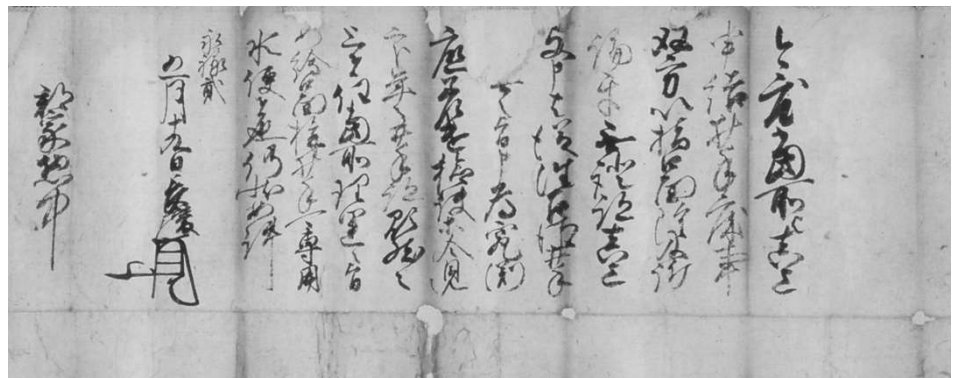


田能から丹波国穴太寺までの距離を示す板碑型の町石

## 5. 戦国時代の天下支配の地・芥川山城

市域は京都に近く、室町幕府管領をつとめる摂津守護細川京兆家が重視する地域であり、一族内の争いが激化する中、永正13(1516)年までに細川高国が芥川山城を築城しました。天文22(1553)年には独力で天下を制した三好長慶の居城となり、天下支配が行われる政庁となりました。四国・阿波国出身の三好長慶は、摂津出身の武士を多く登用しました。市内出身と考えられる松永久秀や、のちに高槻城主となる高山飛騨守・右近親子はその代表です。キリスト教にも寛容で、高山親子をはじめ家臣団にはキリシタンが多くいたと伝わります。

三好長慶や高山右近などの戦国武将は、領地の支配にも意を砕いています。市域には、三好長慶が本市の郡家と真上の村どうしの水争いを裁いた裁決状や、寺領を荒らさぬように高山右近が発した禁制など、このころ領主たちが発給した文書や伝承などが多数残されています。



三好長慶水論裁決状 (郡家財産区蔵・市指定)

上) 三好長慶像 (模本、京都大学総合博物館蔵)

下) 松永久秀像 (本市蔵)

## 6. 希少な大阪府内の城下町・高槻

高槻城は、戦国時代のはじめに入江氏が構え、織田信長の時代にキリシタン大名の高山右近が城下町の整備を進めました。京都と大坂間の要地として徳川幕府が重視し、元和3(1617)年には徳川大坂城よりも早く大改修—事実上の築城工事—が行われました。慶安2(1649)年に永井直清が入城して以降、譜代大名永井家が明治維新まで城主を務めています。

現在の大阪府の範囲内で、江戸時代に整備された城下町は、大坂、岸和田、高槻の3か所しかありませんでした。この希少な町場は武家と町人らの営みの場となり、その文化を示す陶磁器や武具甲冑などの伝来品、町人も城内に入れた盆踊りの記録など多彩な文化財が残されてきました。幕末には著名な漢詩人藤井竹外が活躍し、三の丸ほかの武家屋敷跡では将棋・中将棋の駒や、当時の食生活をうかがう食器、巨大なアワビやサザエの貝殻なども出土しています。

城下町には武家屋敷や足軽屋敷、寺院が西国街道方面の防御を固めるように配置され、城下から領内各地へ通じる道筋沿いに町家が軒を連ね、職人たちは集住していたようです。旧城下町の北部、城北町には、役人や農民が公用で城下へ赴く際に宿泊した郷宿の遺構である「横山家住宅」があり、近世の町並みの様子を今に伝えています。

城は明治初年の廃城令や京都—大阪間の鉄道建設資材に石垣石が搬出されたため、地上から姿を消しました。しかし寺町や紺屋町、馬町、川之町などの旧町名や、碁盤の目ではない町割り・道筋に、当時の名残がしのべられます。



高槻城の模型（しろあと歴史館）



竹外屋敷跡の  
生誕170年記念碑

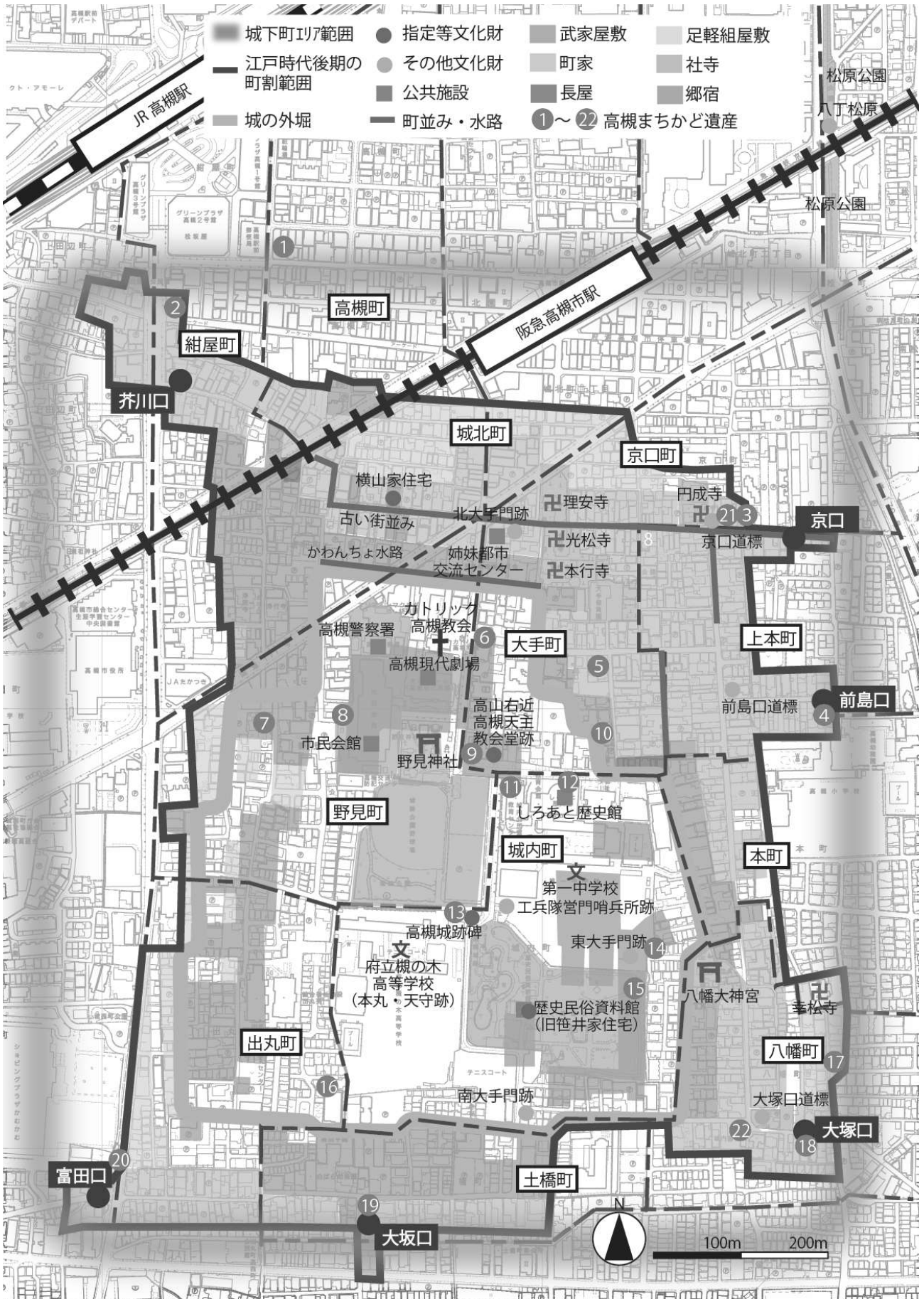


城下に残る横山家住宅（国登録有形文化財）



高槻城三の丸跡出土の将棋駒（本市蔵）

<江戸時代後期の町割>



資料：高槻市立しろあと歴史館 常設展示図録を一部改変（詳細は100頁を参照）

<高槻城下町周辺の高槻まちかど遺産>

番号	まちかど遺産名	説明板所在地
1	松永久秀の鼓塚	高槻町12
2	芥川口とのこぎり形の家並み	紺屋町8
3	京口	京口町5
4	前島口と本町通り東辻の道標	上本町13
5	愛宕信仰の燈籠	大手町4
6	高槻城北大手門跡	大手町3
7	高槻城出丸の門跡	野見町5
8	高槻城三の丸と外堀跡	野見町2
9	ムクノキ大明神	大手町3
10	高槻城の外堀道	大手町6
11	道路に残る高槻城の堀跡	城内町1
12	思案石	城内町1
13	高槻城の石垣石	城内町2
14	高槻藩藩校「菁莪堂」跡	城内町1
15	高槻城三の丸と外堀の段差	城内町1
16	高槻城の蔵屋敷跡	出丸町4
17	都加母止塚	八幡町6
18	大塚口	八幡町10
19	大坂口	土橋町5
20	富田口	城西町7
21	円成寺前の道標	京口町5
22	是三寺前の道標	八幡町11

## 7. 北摂を代表する在郷町・富田と酒造業

富田台地の南東部に位置する富田では、南北朝時代に武家が帰依した禅宗の普門寺が開かれたといい、戦国時代には浄土真宗中興の祖・蓮如が道場(後の教行寺)を設けたことから、寺内町へと発展しました。

江戸時代には、富田台地の清冽な伏流水に支えられ、酒造業を中心とした北摂を代表する在郷町となり、紅屋を中心とする町人らが発展を支えました。黄檗宗を開いた僧・隠元も滞在しています。

富田の酒は江戸でも知られ、最盛期には 24 軒もの造り酒屋があったとされます。現在でも 2 軒の酒造家が操業し、伝統的な様式の町家が景観を形成する他、寺社には町人らが育んだ文化を示す文化財が伝わり、往時の繁栄をしのばせています。



富田の酒蔵での仕込み作業



豪商清水家の菩提寺・清蓮寺

### <富田の主な文化資源・文化財>



寺内町の中心であった教行寺

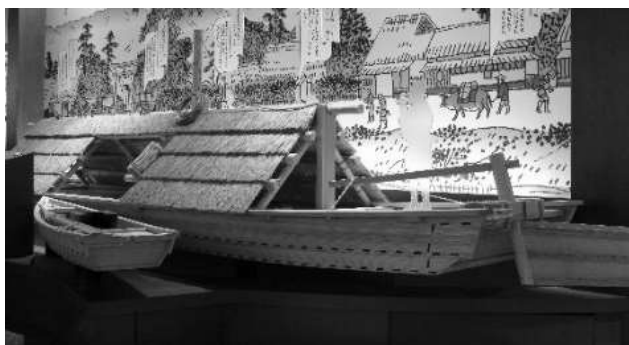


普門寺に残る隠元揮毫の扁額「獅林」

## 8. 京都と大坂を結ぶ淀川と舟運

市域の南を限る淀川では、京都と大阪湾岸を結ぶ舟運が発達し、江戸時代には荷船だけでなく、大坂八軒家と京都伏見との間を旅客専用船・淀川三十石船が1日2便運航しました。淀川舟運は商都大坂の物流を担い、淀川縁の前島浜・唐崎浜・三島江浜などの河港が物資の集散地として発展しました。また市域南端の柱本は煮売り茶舟「くらわんか舟」の発祥の地とされ、大塚には府の無形民俗文化財・三十石船の船頭唄が伝わり、「大塚切れ」の洪水記念碑が守り伝えられるなど、人々と淀川との深いつながりがうかがえます。

古来知られた鵜殿では、太く弾力性に富んだヨシが生育し、ヨシズや和楽器・箏箏の吹き口として重用されてきました。



淀川三十石船とくらわんか舟の模型（しろあと歴史館）



柱本の河川敷「くらわんか舟発祥地」碑



## 9. 鉄道と大学の近代建築

明治時代に入って、高槻ではまず西国街道に沿って官営鉄道（現 J R 東海道線）が敷設、現 JR 高槻駅が明治 9(1876)年に開業、駅は旧芥川宿寄りに設けられ、翌年には京都大阪間の鉄道が開通しました。城下最大の消費者・武士が消滅し、廃城令で農地化していた高槻城跡には、商工業等産業への波及効果等を狙って陸軍工兵隊が誘致され、その後の町の発展にもつながりました。

昭和 3(1928)年には現阪急高槻市駅が開業、両鉄道駅に挟まれた中心市街地では、民営電鉄が計画した住宅開発が進む一方、昭和初(1926)年には京都大学の農場や現在の大阪医科薬科大学が相次いで開場・開学しました。これらの施設には当時の最新技術や最新の様式を取り入れた建築が調べられ、農学や医学の教育研究の場となり、日本の近代化に大きく貢献しました。ウィリアム・メレル・ヴォーリズ設計の大阪医科大学看護専門学校校舎(国登録)や、旧京都大学高槻農場建物群、京都大学阿武山地震観測所、J R 東海道本線のトンネル(ねじりまんぼ)等は日本の近代化の証人ともいえるべき存在です。



安満遺跡公園内の旧京都大学高槻農場建物群



京都大学阿武山地震観測所



大阪医科大学歴史資料館(国登録)



JR東海道本線のトンネル(ねじりまんぼ)